



ローコード開発で 陥りやすい落とし穴とは？

本ホワイトペーパーでは、ローコード開発を採用することでのメリットとデメリットや、陥りやすい落とし穴、その回避方法について紹介していきます。



目次



ローコード開発とは



ローコード開発を採用することのメリット



陥りやすい落とし穴とは



落とし穴を回避するためのポイント



ローコード開発の活用事例



まとめ

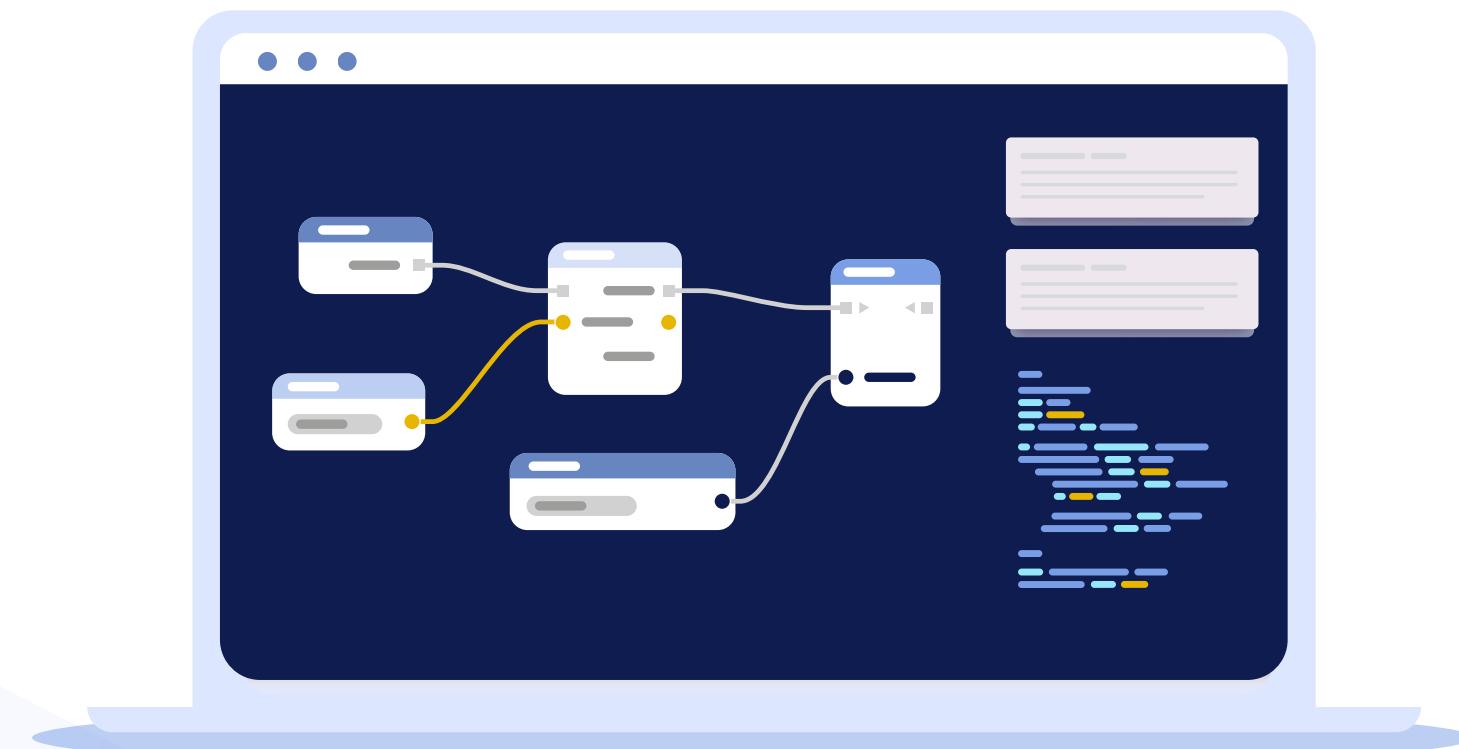


サービス紹介

はじめに

ローコード開発はDXを推進する現代のビジネスでますます重要性を増しているシステム開発手法の一つです。プログラミング経験の有無に関係なく、業務プロセスの自動化や新しいアプリケーションの迅速な構築を実現します。しかし、ローコード開発を採用・導入する前に知っておくべき重要なポイントがあります。このホワイトペーパーでは、そもそもローコード開発は何なのか、そして陥りやすい落とし穴について詳しく説明します。

このホワイトペーパーでローコード開発をより理解し、ローコード開発の取り組みを成功へ繋げましょう。



ローコード開発とは

ローコード開発（Low-Code Development）とは、最小限の必要なソースコードのみを記述し、そのほかの多くの部分を「GUI（Graphical User Interface/グラフィカルユーザインターフェース）」と呼ばれる、視覚的に理解しやすく直感的に操作できる画面を用いて開発する手法のことです。

ローコード開発では、あらかじめ用意された機能単位（コンポーネント）を組み合わせることで開発を行います。ボタンを押すだけで一定の処理が実行されるような機能が用意されており、それらをドラッグアンドドロップして組み合わせることでアプリケーションを開発できます。

特徴①

ソースコードを記述する作業を
できる限り抑える事ができる



極力コードは書かず最小限のソースコードで、アプリケーションを開発するという、海外でも一般的な手法です。特別なプログラミングスキルを持たない人材でも、簡単なアプリケーションから少し複雑なシステムまで一定の品質で開発可能です。

特徴②

視覚的なアプローチ作業ができる



ノーコードと同様、ドラック＆ドロップの直感的操作で開発を行っていくため、プロフェッショナルな開発者も開発生産性を高めながら効率よくスピーディに開発を行うことができます。

ローコード開発を採用することのメリット

ローコード開発では、プログラミングは必要最低限に留めることで短期間で開発が可能です。まったくソースコードを書かないノーコード開発に比べると開発の自由度が高い点がメリットです。そのほかにもローコード開発のメリットは以下のようない点にあります。

メリット



①開発期間を短縮化する

コンポーネントを組み合わせて開発していくため、これまでプログラムを書いていた時間を大幅に短縮することができます、生産性向上につながります。さらにカスタマイズも容易に可能で、スピーディな開発によって、いち早く顧客体験価値（CX）を高めたいユーザの要求にも対応することができます。

②コスト削減につながる

システム開発・運用に割り当てる予算は限られ、常に十分な予算を確保することは困難です。カスタマイズが容易なローコード開発を採用することにより、最小限の工数でアプリケーション開発を行うことができます。人件費、設備費のコストも合わせた削減が期待できるほか、時間コストの削減も期待できます。

③プログラミング知識が不要

特別な開発知識が無くても開発可能なため、アプリケーション開発の敷居が低くなります。これまでシステム部門に任せていたアプリケーション開発なども、業務部門が主体となって進めることができるようになります。作りたいシステムの要件や情報の認識のズレ・ギャップも起こりにくくなります。

陥りやすい落とし穴とは

ローコード開発について理解できたところで、実運用の中で陥りやすい落とし穴について解説します。ローコード開発は便利な機能が豊富ですが、使い方によっては運用がうまくいかず、落とし穴にハマってしまうこともあります。どういう場面で落とし穴があるのか？について詳しく解説します。

①仕組みや処理が複雑化した場合



ローコード開発は、ソースコードを全く書かないというわけではなく必要に応じて書かなければならぬ場合があります。ソースコードを記述した箇所の処理が複雑化してしまうと、エラーが起こった際には専門知識がないと対応が難しくなる可能性があります。

②自由度の高い開発を希望する場合



ローコード開発ツールを使用することで、開発可能なシステムはある程度制限される場合があります。スピード開発には適しており、またカスタマイズも可能ですが、完全に自由な設計・開発を想定している場合には、ゼロからプログラミング開発（スクラッチ開発）を検討した方が良いケースもあります。

③拡張機能を使用する場合



自社すでに利用しているアプリケーションとの連携を考えている場合、連携対応に制限がある場合があります。ローコード開発は必要に応じてソースコードを記述出来ることで拡張性がありますが、必要に応じて対応できると仮定してローコード開発ツールの導入を進めると実現出来ない機能や処理が出てくるケースがあります。

落とし穴を回避するためのポイント

ここまでローコード開発の落とし穴について解説しました。ローコード開発の導入を進めるにあたって、この落とし穴にハマらないようにするために、回避するポイントを押さえて、導入を成功させましょう。

①担当人数、役割を事前に決定する

エラーが起こった際の対応や、その時に必要な行動を事前にまとめておくことが重要です。また担当人数やスキルを把握しておくことで、現状に見合った適切なプラットフォームを選定できるため、とても重要な準備となります。

②開発内容/目的を整理する

開発内容によっては開発可能な内容に制限があるため、開発内容や目的を整理したうえで、適切なプラットフォームの選定を行いましょう。

開発要件を事前にまとめておくことで、運用時のギャップを抑えることができます。

③拡張性をチェックする

自社すでに利用しているシステムやアプリケーションなどと連携することで利便性が向上するため、拡張性の高いものを選ぶことが大切です。

連携先が多いことはもちろん、連携の方法についても確認しておきましょう。API連携なのか、それともプログラミングが必要なのかなどを確認することで運用の負荷が大きく変わってきます。

ローコード開発プラットフォームを活用した事例

まとめ



S O M P O ホールディングス株式会社様

ビジネス部門とシステム部門の
協創・アジャイル開発で関係社員の約90%が業務
負荷軽減を実感

導入のポイント

- ✓ ビジネス部門とシステム部門が協創するアジャイル型開発スタイルへの変革
- ✓ 上記に基づくビジネス部門の内製化の推進
- ✓ グループ会社全体で利用する共通プラットフォームの構築

導入前の課題

ウォーターフォールの開発手法では、激変するビジネススピードへの追隨が困難

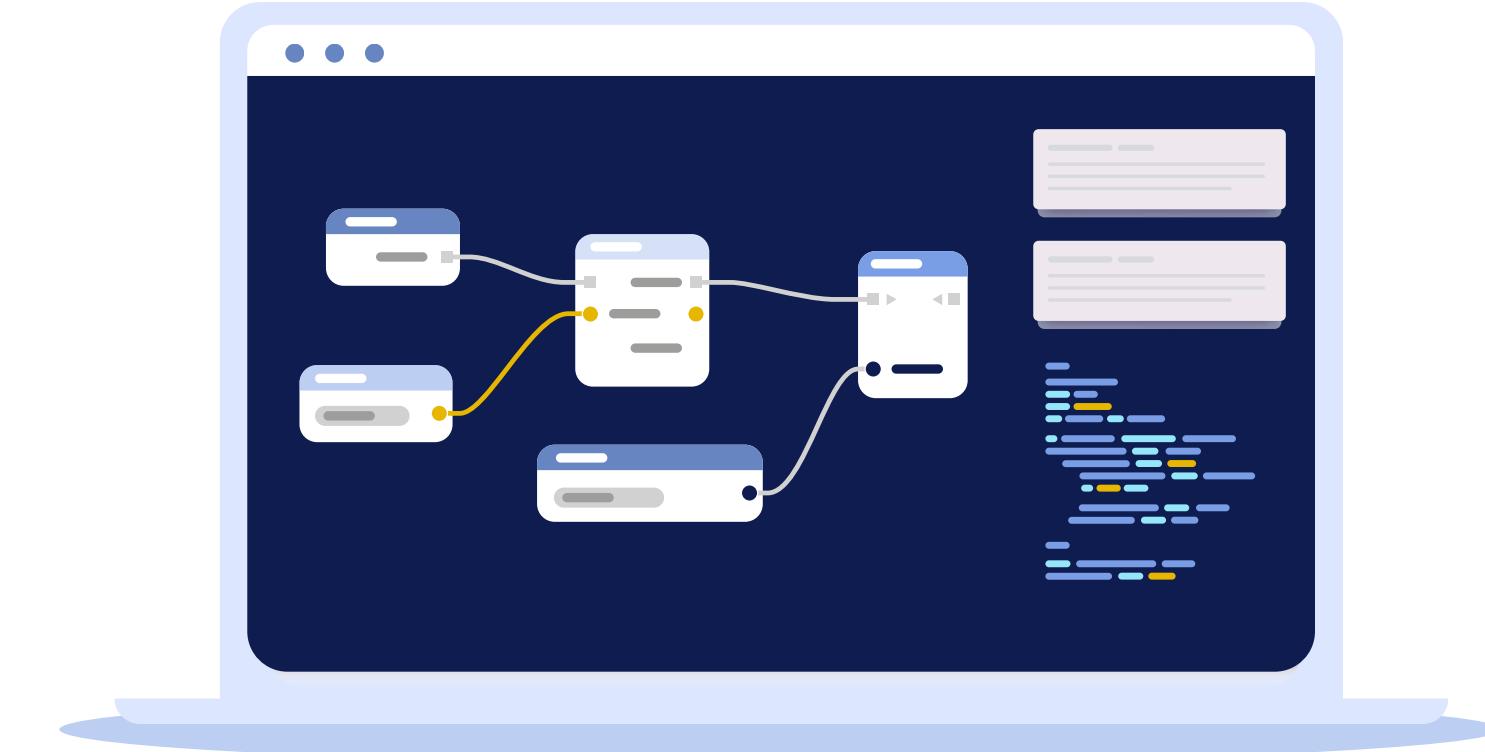
25年以上使い続けていたグループウェア「Notes」の老朽化に加えて、時代とともにビジネス部門の要求とシステム部門の対応にギャップが生じるようになった。また、長年にわたるウォーターフォールを中心とした開発手法、外部の開発パートナーに委託するスタイルでは、多様化するビジネスニーズ、進化するデジタル技術への迅速な対応が、次第に困難となってきていた。そこで、2018年秋頃からNotes移行の検討を始め、2019年3月に業務刷新プロジェクトを本格始動。1,000DB以上にも膨れ上がったワークフローを含む業務アプリケーション（ビジネスコア領域）の移行について大きな課題が残っていた。

導入後の効果

開発に関わったビジネス部門社員の約90%が負荷軽減、約80%が品質向上を実感

現場との協創で内製開発のモチベーション醸成に成功

ローコード開発した業務アプリケーションについてユーザーであるビジネス部門に導入後のアンケート調査を実施したところ、「90%以上の社員が業務負荷軽減、80%以上の社員が業務品質向上を実感している」と回答した。この結果は、従来のシステム導入効果よりも優れたものであり、実際の業務改革や業務のデジタル化に大きく寄与した。アジャイル開発では、システム開発途中に、現場からの仕様変更も柔軟に迅速に受けつけることができるため、その点が満足度向上にもつながった。



ローコード開発は、ビジネスプロセスを迅速化・最適化させ、アプリケーションを開発する手法です。

しかし、開発の自由度、拡張機能、システム連携などについて十分に理解していないと落とし穴にハマってしまう可能性があります。

落とし穴を回避するためには、事前準備として、担当役割の確認、ローコード開発の内容や目的などを整理したうえで適切なローコード開発プラットフォームを取り入れることが重要です。適切な計画を確立することで、落とし穴にハマることなく効果的な運用に繋がります。

ぜひ、このホワイトペーパーの内容を振り返り、自社がどのような状況で何をすべきかを明確にしたうえでローコード開発プラットフォームの導入を進めてみてはいかがでしょうか。

サービス概要

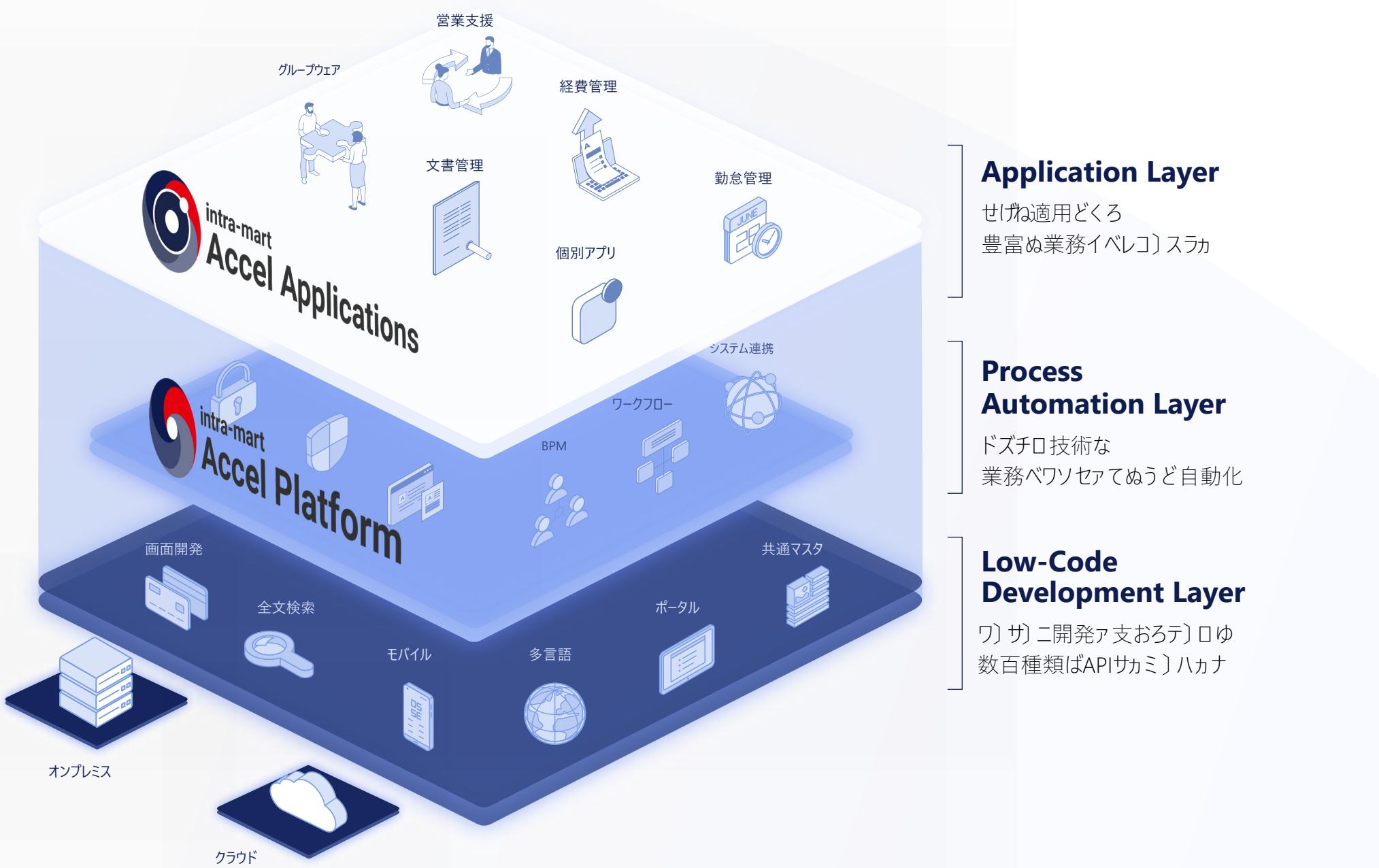
業務プロセスのデジタル化・自動化を実現するシステム共通基盤

intra-mart

攻めのDXと守りのDXを実現 豊富な機能を取り揃えたアプリケーションプラットフォーム

「intra-mart」は、企業内に存在する様々な業務システムを同一のプラットフォーム上に集約し、最新のデジタル技術を活用することで、IT投資の効率化と業務プロセスの最適化・標準化を実現します。

さらに、業務プロセスのフルオートメーション化をサポートする機能とAPIコンポーネント群を多数取り揃えており、スピーディかつ柔軟なローコードアプリケーション開発を可能にします。グループ企業全体での共同利用はもちろん、クラウド利用も可能です。



INDEX

intra-mart Accel Platformは、企業特有のニーズにあわせたカスタマイズしやすいOpenな開発環境と全社員がすぐに使えるEasyを備えています。システム開発に欠かせない機能も豊富に取り揃えており、企業のあらゆる業務課題をサポートします。



ローコード／アジャイル開発

このような課題を解決

- IT人材不足を解消したい
- ビジネスニーズの変化に合わせて、素早く内製でシステム開発したい



業務プロセス改善

このような課題を解決

- 紙運用の業務をデジタル化したい
- 業務プロセスを見直して最適化したい



システム共通基盤

このような課題を解決

- 他システムとの連携でユーザビリティを高めたい
- バラバラな業務システムを効率化させたい

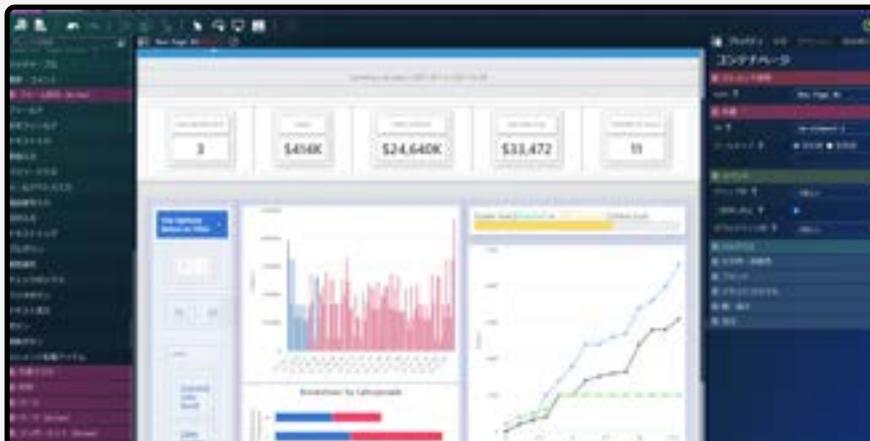
ローコード／アジャイル開発

誰でも作れる、変えられる、運用できる
高い業務生産性を実現する「ローコード開発」

簡易なフォーム画面から複雑な業務画面まで、ドラッグ & ドロップなどの操作で簡単に画面を作成できます。様々なUI部品も備えており、作成した画面はintra-martのワークフロー/BPMとも連携可能です。また、PCやスマートフォン等様々なデバイスで実行できます。

01 Webブラウザ上でかんたん画面作成

簡易なフォーム画面から複雑な業務画面まで、ドラッグ & ドロップなどの操作で簡単に作成することができ、intra-martのBPM/ワークフローとも連携可能です。作成した画面は、PCやスマートフォン、タブレットなど様々なデバイスで実行可能です。



02 ノンコーディングで業務ロジック作成

プログラミングの知識がない方でも、様々な業務処理の部品をドラッグ & ドロップで配置し線でつなげるだけで、業務ロジックを作成することができます。今までコーディングが必要だった処理ロジックもコーディング不要になり、開發生産性の向上が期待できます。



03 柔軟な拡張性と高いカスタマイズ性

システム運用後に生じた変更も、運用を止めることなくWebブラウザ上で設定変更してリリースすることができます。intra-martが持つ様々な業務コンポーネント群と連携できるため、エンタープライズに必要なアプリケーションもお客様に合わせて自由にカスタマイズ可能です。



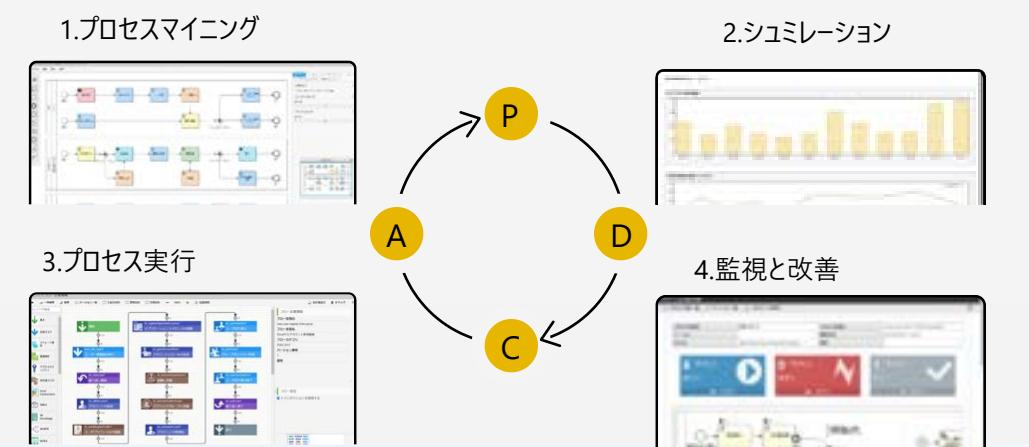
業務プロセス改善

業務プロセスのデジタル化・自動化を実現
業務プロセスのスピードアップ

紙で運用している業務のデジタル化はもちろん、システムの個別導入によって分断された様々な業務を一連のプロセスとして可視化し、継続的な改善によって効率化を実現する、業務プロセス管理ツールが揃っています。

01 継続的な業務プロセス改善を実現

各部門の業務プロセスを可視化し、定義～実行～モニタリング～改善という、継続的な業務改善の仕組みを確立することができます。現在のパフォーマンス状況を表示したり、過去の状況や今後の予測も可能です。

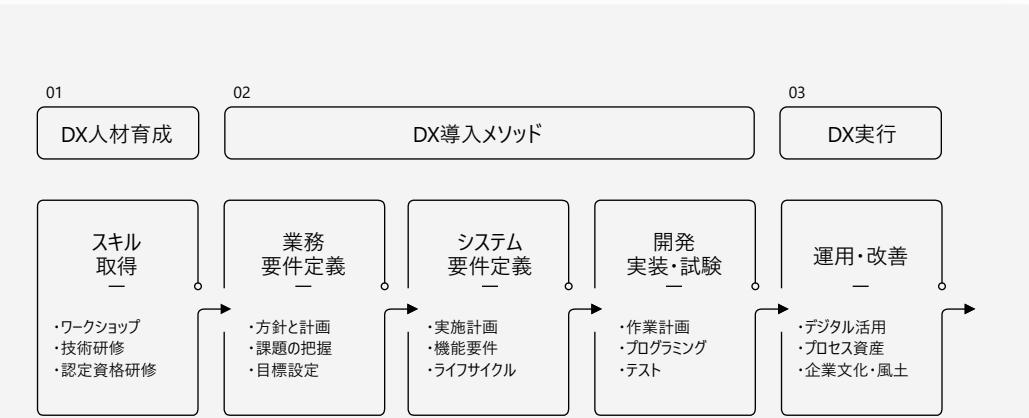


02 ワークフロー×ローコード開発による 高い開發生産性

intra-martのBPM/ワークフローとローコード開発ツールを組み合わせることで、システム構築において高い開發生産性を実現します。カスタマイズ性が高く、業界問わずお客様独自の業務・運用に合わせたシステムが構築可能です。

03 包括的なDX業務改革をトータルサポート

BPMを活用した業務プロセス改善を実践するための様々なサポートサービスを提供しています。DX人材を育成するプログラムやあるべき業務プロセスの策定、製品の導入、アフターフォローまでトータルで支援しますので、初心者の方も安心してご利用いただけます。



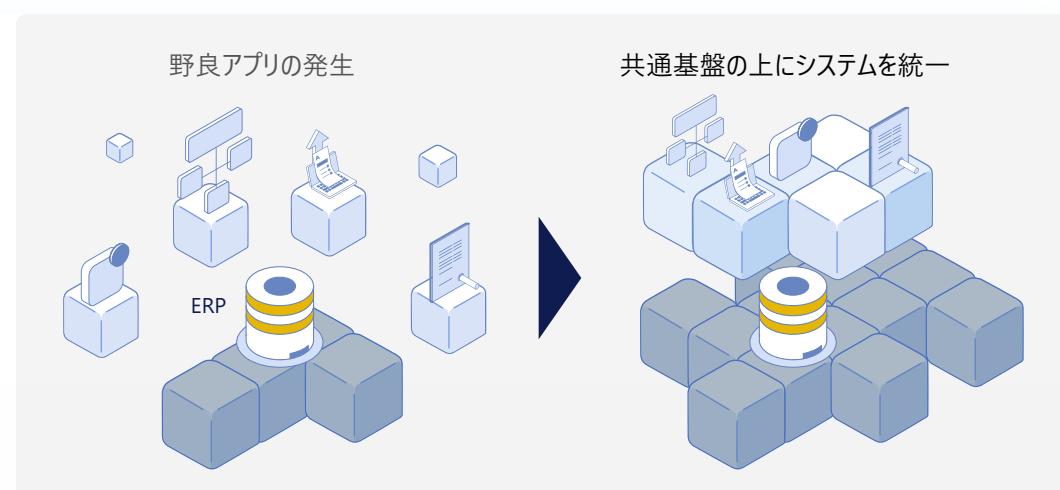
システム共通基盤

混在する業務システムを集約することで
IT投資の効率化・標準化を実現

業務システムの集約によって、IT投資の効率化と標準化を実現します。ガバナンスを保ちながら、小規模利用から全社・グループ展開へと、ビジネスの成長に合わせて利用範囲を拡張させることができます。

01 システム共通基盤によるガバナンス

企業内に存在する業務システムを一つのプラットフォーム上に集約することで、IT投資の効率化と業務の標準化を実現します。また、PaaS基盤としてグループ企業内の共同利用も可能です。

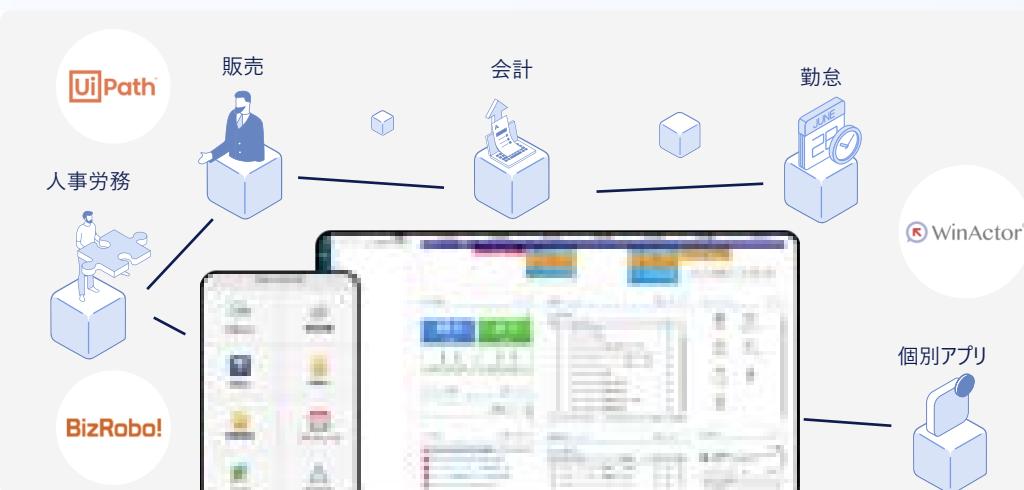


02 開発ツールの組み合わせで自由にカスタマイズ

プラットフォーム上に用意されている、ローコード開発を含む豊富な業務コンポーネントを活用することで、複雑なWebシステムもスピーディに構築できます。ソースコードも公開しているため、独自のフレームワークとしてカスタマイズ可能です。

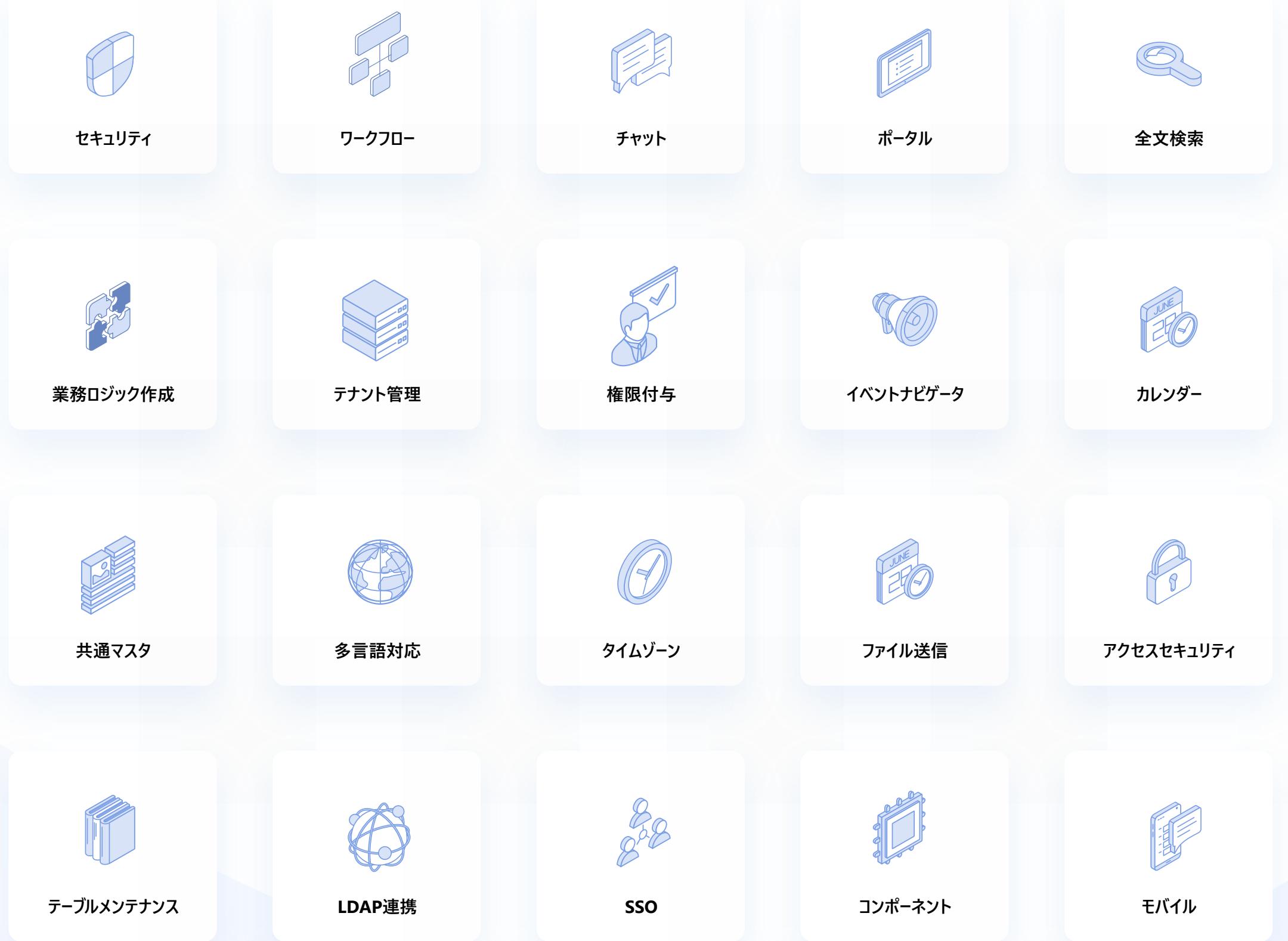
03 柔軟なシステム連携でユーザビリティを向上

外部システムをつなぐモジュールによって、グループウェアといった情報系システムや会計などの基幹システムに同一画面からアクセスできるため、操作性を大幅に高め、業務効率を向上します。



その他の機能

Webシステム開発でよく利用される機能をAPIで数百種類提供しています。これらを自由に組み合わせてシステム開発を行うことで、お客様の業務に合った APPLICATION を短期間で柔軟に構築することができます。





東京本社

東京都港区赤坂四丁目15番1号 赤坂ガーデンシティ5階

TEL : 03-5549-2821

関西営業所

大阪府大阪市北区堂島三丁目1番21号 NTTデータ堂島ビル2F

TEL : 06-6210-4861

HP

<https://www.intra-mart.jp/>

お問い合わせ

<https://www.intra-mart.jp/inquiry.html>

名古屋営業所

愛知県名古屋市中区栄2丁目1-1 日土地名古屋ビル4F

TEL : 052-990-9134